
咎狗の褓魔師

武藤 徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咎狗の袂魔師

【Nコード】

N1613V

【作者名】

武藤 徹也

【あらすじ】

親、兄弟のいない天涯孤独の少年 はなかわ 羽代暁緒 あきお。暁緒は児童養護施設 天使の園で引き取られていた。施設と言ってもそこは教会。その教会の神父、桐生龍一郎 きりゅうりゅういちろうは悪魔を祓う袂魔師 エクソシストだった。

悪魔とは人間の魂と墮天使が融合した者だ。だが絶対に悪魔になるとは限らない。亡霊、吸血鬼、ゾンビと様々な化物へと変わることもある。

だが、それは普通の人間では直視できない。ちゃんと洗礼を受けるか墮天使に人的ダメージを受かるか。そして悪魔にしか見えない

のである。

暁緒は突然ある日、堕天使が見えるようになった。

そして、自分にわけの分らない力が右手に宿る。

だがそれと同時に、暁緒の体に『神の光^{ルシファー}』という堕天使が乗り移ってしまった。龍一郎は暁緒を助けるがため自らルシファーの器となり暁緒に自分を殺すよう言う。

そして暁緒は自らの右手に宿った力で龍一郎を殺める。

そして暁緒は龍一郎の墓の前で決意する。

サタンを殺すと。

いま、運命と決意が交差するとき物語は始まる。

前触れ

光の少ない薄暗い路地裏。そこに、初老の男がいた。白髪でオレンジ色のレンズの眼鏡、この都会とは似合わない 神父服、首には黄金に輝く十字架。

「おいおい、やめてくれよ。悪魔の端くれ如きが人様の血を貪り吸うなんてよ〜」

気軽な調子で目の前の『何か』を見る。そこには口の周りを赤色に染め鋭い牙猛獣のような目。まるで人ではないような容姿。

ガルルルル、と飢えたライオンのような鳴き声を出す男。同時に餌を守るような態度をとる。

男はそんな猛獣のような男の態度を気にせず目線を下へ向ける。

視界にはコンクリートの地面を染める深紅の液体。それと同時に、冷たい地面に倒れている一人の女性。微かに息がある。

「貴様は………」

血まみれの男はつぶやいた。それに応じたのか神父服の初老の男

は言った。

「エスソシスト 被魔師、きりゅうりゅういしちゆう 桐生龍一郎だ」

エクソシストという単語を聞いた血塗れの男は少し驚いたような態度をとったがその後、微かに笑い言った。

「サタン 魔神様を冒瀆する神の狗か」

「………四方を守る守護神獣よ」

龍一郎は血塗れの男を無視して言った。

「ここに罪ある者を楔ぎ被う聖域を作り出せ。玄武、青龍、朱雀、
びやうこ 白虎」

冷徹に淡々と言葉を出す。この状況を無視してわけの分からない単語をすらすらと言う龍一郎。

「聖域は完成した。次に術式を作成する」

「黙って見ていれば……訳のわからねえこと、言ってんじゃね

えよオ！！！！」

すると人間離れしたすさまじいスピードで龍一郎に急接近する。

だが――。

「跪け」

重苦しい言葉と共に血塗れの男は地面に押し付けられた。まるで何十トンの錘を押し付けられたかのように。何万トンの水を被ったかのように。

「なっ……何が……」

血塗れの男はつぶやいた。

「言っただろ。ここはもう、『普通の場所』じゃない、『聖域』だ。お前みたいな堕天使にここは自由に歩くことさえできない」

それだけえを言々と血塗れの男を見下しながらあの詠唱の続きを言う。

「我はこの聖域に居座る者。この聖域を汚す者に裁きの炎を、始まりにして裁きの象徴、それは迷える子羊を導く灯火。それは悪しき者を苦しめる裁きの業火。そして始まりを示す原初の炎。光を、祝福を。今ここに、魔を楔ぎ祓れ『絶対聖域』^{ジャッジメント}」

すると地面が赤く輝く陣を表した。血塗れの男は何が起こったのか状況が分からず回りをキョロキョロする。すると深紅の光が血塗れの男を包み込んだ。裁きの象徴。魔の者を殺す業火。

「神の裁きを受ける」

すると光が突如、炎へと変わった。

ぎゃあああああ！！！！と叫ぶ血塗れの男。全身が炎に包まれ暴れても炎を消えやしない。

「終わったな……」

炎をが消え後に残ったのは灰だけだった。だがその黒い炭となった体から声が聞こえた。

「なぜ、こんなに炎が舞ったのにあの女は生きている！！」

「……この術式は十字教と風水術を混合させたものだ。裁きと聖域。絶対破壊と絶対防御。人は決して傷付けることはない術式だ。

お前みたいのに使うのは勿体無い代物なんだぜ？」

「人間如きが！魔神様サタンの御使いを殺してただで済むと思うなア！！」

「魔神サタンは死んだ。もういない」

下半身を失い、体が半分しかない血塗れの男に哀れみの目で見つめる龍一郎。

「お前ら堕天使は元々、神がオレ達、人間に信仰心を試しそして信仰心を高めるための地位だった・・・嘗てお前らはオレ達『人間の敵』だった。いつからだ、お前らが『神の敵』になったのは？」

それを聞いた血塗れの男は気を取り乱し怒り狂い叫んだ。

「神は我々を見捨てた！！我々は地獄に落とされ！地位も名誉も奪われた！！神は我々の敵だ！！憎むべき相手だ！！」

「それでも、神はお前らを信じていたはずだ。お前らに罵声を受けようと、憎まれようと、信じていたはずだ」

まるで神と同じ気持ち語るように悲しげに言う龍一郎。それを聞いた血塗れだった男は高ぶる気持ちを抑えることができない。

「じゃあなぜ、神は我々を地に堕とした！？なぜ、あんな辛い思いをしなくちゃいけなかった！！！」

「・・・・・・・・」

「もうすぐ・・・・もうすぐだ・・・・この地にルシファー様がこの地に降りられる。魔神様サタンは、まだ、生きている！！さあ、人間ども！！魔の光に脅えるがいい！！ひゃっひゃっひゃっひゃっああ！！！！」

それだけを言い残すと血塗れだった男は灰と化し風と共に吹かれていった。

龍一郎は風の流れを見届けるとポケットから携帯を取り出した。

「恋愛、オレだ。被害者の手当てと現場の処理を任せる」

それだけを言うとボタンという音と共に携帯を閉じる。

ポケットに携帯をしまうと倒れている女性の前へと向かった。膝を突き十字架を空中で描くように指を動かした。

「すみません、我々が貧弱がためにあなたのような人を巻き込んでしまった、赦しを……。そして神の祝福があるように」

聖職者の言葉を被害にあった女性にかける。早く救えることができなかつた自分に怒りを覚えながら。

「派手にやりましたねー龍一郎さん」

さつき紅い閃光を放った路地裏で龍一郎と同じ格好をした被魔師^{エクソシスト}達が集まっていた。

その中できわめて目立つこの娘、草薙恋夏^{くさなぎこなつ}。もう、三年近く草薙と仕事をしているが未だにありえない、と龍一郎は思う。赤色の髪の毛、二三歳とは思えない身長。だいたい一三二センチでもはや黄色い安全帽をかぶせて赤色のランドセルを持たせればもう小学生としか言いようが無いことになる。だがそんな可愛らしい(?)容姿に似合わない物があつた。

刀。しかも本物の。

「派手なお前にいわれたくねえよ」

「やだー龍一郎さんつたらー私を褒めても何もでもせんよー」

照れながら赤く染まつた頬を両手で抑える恋夏。

別に褒めたつもりはねえんだが、と付け加える龍一郎。周りは、

はははは……。と苦笑いをする。

「……。ここどころ、悪魔が多くなってるな」

「ですね。今日でも五件ありましたよ」

「。。。。。。」

「如何しました？黙り込んで」

「。。。。あの吸血鬼。。。変なこと言ってたぞ。もうすぐ、ルシファーが降りてくるってな」

「『ルシファー』……大天使『ミカエル』の双子の兄弟だった。ミカエルの地位よりも高い地位にいた墮天使ですか……」
「降りてくる前触れかもな」

恋夏はしばらくだまった後、龍一郎に言った。

真剣な顔で最悪の可能性を述べた。

「もしかして、本当にサタンが本当に……」——「ありえねえよ」

恋夏がしゃべってる途中に邪魔するかのような感じで言う龍一郎。とある昔話。ある町の天空で異形の羽を持つ神と裁きの光を纏う神が嵐のごとく戦っていた。嘗て契りを結んだ、神の殺し合いだった。

^{サタン}魔神。異形の羽を持つ神。

戦いの末、^{サタン}魔神は死んだ。神に心臓を貫かれ。

「あれで^{サタン}魔神は死んだんだ」

「ルシファーは何と融合をするのでしょうか……」

「まず、あんな強大なエネルギーの集合体を取り込める魂なんてねえだろ？」

「ですが……この『世界』に一人います……」

龍一郎は首をかしげた。

「佐崎王真、ですかね？」

その言葉を聞いたとき回りの^{エクソシスト}被魔師はビクツと体を震わせた。

「^{サタン}魔神の化身にして『神の右手』を持つ者。貴方の教会にいるじゃないですか？」

龍一郎は黙り込んだ。

息子同然の王真。

「俺がさせねえよ。オレはあいつの^{オヤジ}義父だ。神に誓って死んでも守り抜く」

そうですか、と笑顔で龍一郎を見る恋夏。

龍一郎は恋夏に目線を逸らさず目つめる。

「龍一郎さん、そんなに見つめられると照れちゃいますよ」

真剣な空気の中で最後の最後でボケをかました恋夏だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1613v/>

咎狗の祓魔師

2011年11月13日08時59分発行